

救急病棟



土井 健 二（無名会）

季節の変わり目だったり、急に気候が変わったりすると近所に救急車が駆けつけてくることがたびたびあります。夜中ベッドの中で遠くでサイレンが鳴っているなど聞いていると、すぐ近くでサイレンが止まり、思わず窓を開けて止まった家を確認したりすることがあります。

そういう私も、救急車ではありませんが、救急病棟で一晩を過ごした経験があります。場所は米国バージニア州のある救急病院。週末の夜10時過ぎに知り合いの車で担ぎ込まれたのです。

その日は始めたばかりのゴルフに行く約束をしていました。朝起きたときは何ともなかったのですが、何となくお腹の調子が今ひとつだなと感じていました。しかし、男たる者ゴルフの約束は必ず守らなければと勝手に思いこんでいましたし、まして職場のボスとの約束でしたので、多少の無理を承知で出かけていきました。

ところがラウンドを開始する頃には下痢がひどくなり、かなりまずい状態になってきたと感じ始めていました。あちらのゴルフはカートで回るのが普通ですので、多少具合が悪くても何とかラウンドは可能ですが、下痢をしながらのラウンドは何ともしんどいものです。ホール毎にトイレがあるわけではなく、ボールを探すふりをして雑木林のなかで用を足さざるを得ない状況も出てきました。

さすがにボスも私が真っ青な顔で回っていることに気がついたのか、16番ホールで切り上げて先に帰ることを勧めてくれました。

這々の体で車に乗り自宅へ向かいました。自宅までは高速で約20分程度でしたが、運転中に突然全身に寒気がおそってきました。初夏というのに車内の暖房を全開しましたが、ハンドルを持つ手がぶるぶる震えてきて、吐き気までもようしてきました。そ

して、ついに我慢できず高速道路の路肩に車を止めてかなり戻してしまいました。しばらくしてから運転を再開して何とか自宅にたどり着いたのです。

女房に吐き気と寒気を伝えベッドに横になりましたが、今度は体温がものすごい勢いで上がっていくではありませんか。普段、体温が低い私にとって37°でも苦しいのに、38°、39°、40°と。正直言って、異国の地で倒れたなんとかという小説の主人公が頭をよぎりました。女房は、最初、風邪くらいだろうと思っていたようですが、私が体温の上昇にびびっているのを見て、職場のボスに電話してくれました。

外国での駐在や留学で一番心配なことは病気になったときの医者です。現地の医者とのコミュニケーションがとれないのが一番心配なところ。機転の利くボスは、現地に長く住む友人を伴って我が家に来るや、私と女房を乗せて救急病院に直行してくれました。

病院で受け付けをした後、長い間待合室で待たされました。誰もいない待合室で横になっていると、看護婦が来て、熱があるから上着は脱ぐようにとアドバイスする以外は、なしのつぶてで、待てども待てども診察は始まりません。自力で歩いてきた患者でしたので後回しにされたのでしょうか。これならもっと大げさな表情で受け付けをすべきだったかもしれませぬ。そうこうするうちに、なんと熱がやや落ち着いてくるではありませんか。これほど大騒ぎして病院に来たのに、熱が下がってくれてはと心配事は別のほうに向かっていきそうでした。

日付も変わってかなりたってから、診察室に連れて行かれました。看護婦が、「デージー？」と聞いてきました。デージープリンタなら知っていましたがデージーって何？看護婦のくらくらする動作でなんとか理解して、「ノー」と答えました。そし

て、宿直の医者がやってきて病状を訪ねてきました。同伴してもらった方に通訳をしてもらいながら、熱が上がったこと(ハイフィーバー、これくらいは知っていました。ナイトフィーバーが流行ったあとでしたので)、下痢をしたこと(ダイアリーア)吐いたこと(ボーミッシング)などを説明し、原因がわからないことも説明したところ、医者は検査を始めたようでした。

しかし、検査しても原因不明のようで、どういう訳か、そのうち医者が「エイズの検査をするが良いか？」と私に承諾を得にきました。全く勘違いもほどほどしいとは思いましたが、反論する元気もなく同意してしまいました。今思い返せば同意したこと自体、何かやましいところがあるとられるので、同意すべきではないと思いますが、その時はそんな余裕はありませんでした。付け加えますが、検査結果はもちろんネガティブでした。

やがて白々と夜が明ける頃には、気分も落ち着いてきました。医者は原因不明だし、患者は落ち着いてきたので、とりあえず帰宅させることにしたようで、午前10時頃、帰るように指示され病院を後にしました。いったい何だったのだろうかというのが、正直な感想でした。周りの方を巻き込んで救急病棟に担ぎ込まれながら、その期待？ に答えるだけの状態でなかったことを申し訳なく思いました。

帰宅してから前日の症状が嘘のように回復しました。帰宅後、回復に時間がかかったという記憶はありません。一過性のものだったようです。

最近、久しぶりに会ったボスに、当時のことに触れられ、ああーそういうことがあったなと思い出した次第です。

以上が、私が異国の地で体験した、救急病棟です。タイトルの割にはたいした話ではなく、今度はこの会員たよりを読んでいただく方に申し訳ないしいです。

その後、同じゴルフ場でホールインワンを記録しました。その記録が未だにクラブハウスの壁に残されています。それを見た方にあれはあなたに間違いないか？ と聞かれることがたびたびあります。楽しい思い出もありますが、それ以上に救急病棟の思いでは一生忘れないでしょう。

最後に、後日談として、女房と当日のことを話す機会がありましたが、そのとき、例のエイズチェックのことが出てきて、女房はその時「どこでもらってきたのだろう」と思ったと言っていました。医者は「チェックをする」と言っただけで、感染しているとは言っていない！のに、たぶん、同意したこと自体が誤解を与えたのかもしれない。皆さん、どんなに追い込まれた状況でも、安易に同意することには気を付けるべきですね。反省。